

令和7年産 ちくしB5号栽培ごよみ

三井地区農業振興協議会
JA 三井
久留米普及指導センター
令和7年4月作成

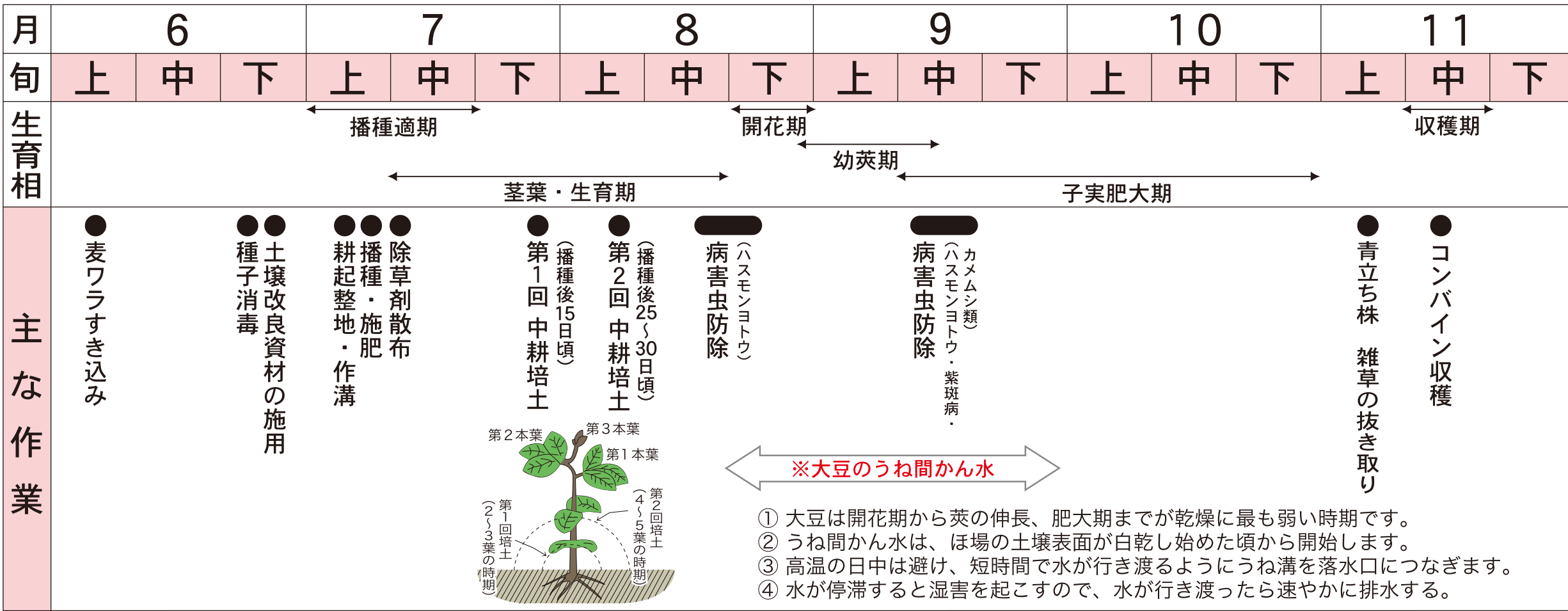


増収と品質向上のポイント

- 作付の団地化と排水対策
- 適期適量播種（7月20日までに播種完了）
- 中耕・培土の徹底（生育促進と倒伏防止）
- 除草と病害虫防除の徹底

運動の目標 三井地区大豆生産性向上運動

- ① 単収の向上：10a 当り270kg
- ② 団地化率の向上：100%
- ③ 品質の向上：上位等級（1、2等）比率90%以上
- ④ 種子更新率：100%
- ⑤ 栽培履歴（作業管理日誌）の記帳、提出



1. 土づくり

目的	資材
酸度矯正	生石灰 100kg/10a ※播種10日前までに土壌混和する
石灰、苦土の投入	ミネラルG 200kg/10a 炭酸苦土石灰 200kg/10a

地力の維持向上には大地のめぐみちゃん(堆肥)1t/10a、わらの全量すきこみが効果的

2. 排水対策

- ・隣接する水稲ほ場からの漏水を防ぐため、大豆のほ場の団地化を図りましょう。
- ・極端に排水が悪いほ場では、ブラウ耕や弾丸暗きょにより排水を促しましょう。
- ・播種後の湿害対策にはうね立て播種が有効です。うね立てには培土板やロータリー爪の付け替えによる方法があります。

3. 種子消毒

目的	農薬	使用量
紫斑病予防 ハト害対策	キヒゲンR-2フロアブル	種子10kgに対し200mlを塗抹処理

4. 播種基準

播種時期	適期播		遅播
栽培密度	7月1日～10日	7月11日～20日	7月21日～31日
条間×株間(cm)	70×25	70×20	70×15
m ² 当り株数(×2粒)	5.7株	7.1株	9.5株
播種量(kg/10a)	3.5	4.5	6.0

播種量はその年の種子重量により多少前後します。
播種深度は3cmを基準とする。土壌が乾燥している場合やしばらく降雨予報がない場合は5～6cmと深めに播種し、鎮圧を強めに行う。

5. 施肥基準

肥料名	基肥量
ちくこのめぐみ444	15kg

※生育不良田については開花期までにNK化成2号を10kg施用しましょう。

品種特性表

品種名	播種期 月 日	開花期 月 日	成熟期 月 日	花 色	主茎長 cm	耐倒伏性	耐病性	10a当り 収量 kg	品 質	百粒重 _g	へその色
ちくしB5号	7.10	8.21	11.1	紫	67	やや強	強	366	中上	32.4	黄

6. 除草剤使用基準

(使用薬剤については記載事項を厳守すること)

区分	除草剤名	使用量/10a 薬量	希釈水量	適用雑草	使用時期
播種前	ラウンドアップマックスロード	200～500ml	100ℓ	一年生雑草	耕起前まで
初期 除草剤	ラクサー乳剤	400～800ml	100ℓ	一年生雑草	は種後出芽前 (雑草発生前まで)
	エコトップP乳剤	400～600ml			
	エコトップP細粒剤F	4～6kg			は種直後 (雑草発生前)
	クリアターン細粒剤F	4～5kg			
生育期 除草剤	ポルトフロアブル	300ml	100ℓ	イネ科雑草 (イネ科雑草3葉期～10葉期まで)	収穫30日前まで
	パワーガイザー液剤	300ml	100ℓ	一年生雑草 (雑草発生始期～2葉期)	出芽直前～3葉期まで
	アタックショット乳剤	50ml	100ℓ	一年生広葉雑草	本葉2葉期～開花前

※生育期のパワーガイザー液剤およびアタックショット乳剤の使用により大豆の葉に葉害が生じることがあります。

7. 病害虫防除

(使用薬剤については記載事項を厳守すること)

防除時期	対象病害虫	農薬名	希釈倍数	使用回数	備考
8月中旬～下旬ごろ	ハスモンヨトウ	ノーモルト乳剤	2000倍	2回以内	早期発見、早期防除に努めましょう
9月中旬～下旬ごろ	ハスモンヨトウ	プロフレアSC	4000倍	3回以内	幼莢期から子実肥大期の病害虫防除
	カメムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2000倍	2回以内	
	紫斑病	トップジンM水和剤	1000倍	4回以内	
10月中旬ごろ	カメムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2000倍	2回以内	

※子葉展開期（播種時～本葉2葉期）にネキリムシの食害がみられた場合は、ネキリエースKを10a当り3kg散布してください。

8. 収 穫

- ① コンバインでの収穫は、成熟期から1週間後、子実水分15%が適する。(折り曲げると茎が完全に分離するのが目安)
- ② 成熟期とは、大部分の葉が落ち、莢が褐変し、振れば「カラ・カラ」音がするようになった頃です。
- ③ 汚損粒防止のため青立ち株及び雑草(ホオズキ・アサガオなど)は収穫2週間前までに抜き取りましょう。

農薬の登録内容は随時変更されますので、使用する際にはラベルをよく確認して下さい。
周辺作物へ農薬が飛散しないように注意しましょう。